研究発表　分科会 5-2　身体と社会 10 月 15 日（日）17：10-17：50　第一校舎 121

ジョン・デューイの美的経験論と日常美学
―― カッレ・プオラッカによる整理を中心として

群馬県立女子大学　青田 麻未

本発表は、ジョン・デューイ（John Dewey, 1859-1952）の美的経験論が、現代の日常美学のコンテクストにおいて、日常生活における美的経験を説明する基盤としてどのような有効性を持つのかを明らかにすることを目指す。

日常美学は 2000 年代後半からさかんに議論されるようになった美学の一分野である。だがそもそも、日常美学の論者たちのあいだでも、なにを美的経験として認めるのか、という点で議論の対立がある。日常的に繰り返し行うルーティーン的行為のなかで感じられる快をも一種の美的快として位置づけ、芸術経験と種類こそ異なれど質的に劣らない美的経験が成立すると主張する論者がいる（Haapala [2005]; Saito [2007][2017]）。他方で、日常はそのままではやはり日常に過ぎず、なんらかの異化を経て特別なものとならなければ、芸術同様に強度のある美的経験を提供するものにはならないと主張する論者もいる（Leddy [2012]）。この論争は、平凡／非凡あるいは親しみ／新奇さのような二項対立のうちに日常生活における美的経験をどう位置づけるかをめぐったものである。

そしてこれらの議論のなかで、時に肯定的に、時に批判的に、しかしかなりの頻度で検討されるのが、デューイが『経験としての芸術』（1934 年）において展開した美的経験論である。デューイは美的経験を「一つの経験 (an experience)」ということばで特徴づける。彼の美的経験論の骨子は、一般に次の二点に集約されるだろう。第一に、デューイは、美的と呼べる要素は知的活動や道徳的活動など、伝統的に美的経験とは区別されてきた経験のうちにも多かれ少なかれ見出すことができるとした。だが第二に、デューイは芸術以外の物事も我々に美的経験をもたらしうるとする一方、もっとも強化・純化された美的経験を与えてくれるものとして芸術を位置づけた。デューイの議論にもとづけば、結局のところ、美的経験は日常のなかに見出されるものだとしても、平凡なものではなく非凡なものだ、ということになるように思われる。だが、果たしてデューイの議論はそのような単純な図式のもとで理解されるべきものだろうか。

フィンランドの美学者カッレ・プオラッカ（Kalle Puolakka）の一連の論稿は、デューイの議論の日常美学への援用方法を検討している。本発表は、デューイにおける想像力のはたらきに注目するプオラッカの諸論稿を出発点として、デューイにおける「一つの経験」としての美的経験が、それ自体は非凡な経験であったとしても、どのようにして私たちの日常生活のなかに組み込まれうるかを検討する。プオラッカ自身は、デューイ美学にもとづくと、日常生活における規則的なルーティーンがもたらす親しみを美的なものとみなすことは難しいと考えている。本発表では、日常生活のなかのいくつかの具体的な局面を例示しながら、このプオラッカの主張の妥当性について検討し、デューイを現代の日常美学のコンテクストにおいてプオラッカ以上に幅広く援用することができないか、その可能性も探る。